

第21回世界獣医学会報告

誌名	鶏病研究会報
ISSN	0285709X
巻/号	161
掲載ページ	p. 7-13
発行年月	1980年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



第 21 回世界獣医会議報告

吉 村 昌 吾

(愛知経済連農畜産物衛生研究所, 444 愛知県岡崎市岡町出合)

1. 会議場とモスクワの印象

7月上旬のモスクワは雨がよく降って、1週間のモスクワ滞在中、雨のない日は1日だけで、開会式が行なわれた朔日も雨であった。式場はクレムリン内の大宮殿の会議場で、会議の休憩時に廊下の大きな窓から見ると、帝政ロシア時代の宝物などを飾ってある武器庫の前に、ずらりと並んでいる19世紀の大砲も雨に濡れていた。会議場は6,000人が入れるという大きなものであったが、ほぼ満席となった。しかし、その約半数は女性の同伴者であったことで、会場の敷物が真紅であったことと相俟って、式の雰囲気は華やかであった。世界各国から参加していたが、とくにソヴィエトと北欧の人が多かったのは当然で、我国からも、大学教授、各研究機関の研究者、農業団体および開業獣医師など約50人が参加していた。壇上には会議の理事、運営者が80人程ずらりと並び、次から次へと長々と演説した。主にロシア語とフランス語で行なわれ、只管に演説の終ることのみを願った。

閉会式もまたこの会議場で行なわれ、その形式は開会式と全く同じであったが、開会式よりさらに参加者が集まって、6,000人という席は満員で、やっとの思いで席をとった。午後4時からのロシア語とフランス語の長々しい演説に世界各国の獣医が魅力をもったのではなく、引き続いて、ここで行なわれたロシア民族舞踊を、なるべくよい場所で観たいという最も普通の願いが閉会式をより盛大にしたのである。

美事な統一のある優美さで、広いステージ一杯を流れるよう、迂るようにあるいはダイナミックにくりひろげられた踊りに、6,000人の参加者は

酔った。

クレムリンは暗くて厳めしい予想を裏切って、大変明るく、愉快的印象を受けた。クレムリンを囲む城壁と要所要所にある高く尖った塔は、お伽話の王様の城のようで、練瓦色と縁の美しい調和を見せ、その内部の建物は、いづれも巨大であったが、黄色を主調とし、緑と白の配色がなされ、中央部にあるロシア正教の大きな寺院や鐘楼は白くて、特徴のある円い屋根は時おり洩れてくる陽の光に金色に輝いた。これらの多様で、多形の建物が交互に造り出している構図は美事であった。

クレムリン中央部のイワン大帝の鐘楼という建物の傍には直径80cmもある巨砲と、球形の弾丸5コが据えてあったが、どう考えても撃てるはずのない飾物である。その近くには高さ6mもある大きな鐘が置いてあって、その昔、火災に遭ったとき、あまり急に冷やしたので一部欠けたという。これらの置物の呼び名は大砲の王様、鐘の王様というそうだ。これらをクレムリンの真中に据えているロシアの気質は何とも面白い。

講演が行なわれたのはホテルロシアで、6,000人が宿泊出来るといい、参加者のほとんどがここに泊った。ホテルはクレムリンのすぐ近くにあって、クレムリン前の赤の広場はホテルから坂になった舗道を1kmほど上ったところにある。意外に狭くて広場の周りには帝政ロシア時代の厳めしいが美しい建物が並んでいる。広場の中央にある径10m程の円くて低い囲いは、昔処刑台であったという。帝政時代には、ここで多くの謀反人を絞首にしたことであろう。

広場の正面のクレムリンの城壁にくっついている四角で平たい石を積み上げたような正面巾が50m程の建造物がレーニン廟である。廟をお参り

1979年11月20日受付

するために、日曜日にはモスクワ市民、兵士、近在からの農民が長い長い列を作った。ここに並ぶ多くの人達は、鼻や頬が赤く陽に焼けて、体格はごつごつし、夏服から冬服まで区々で色とりどりの服装をしていた。列は赤の広場を横切って、坂を下り、さらに城壁に沿った公園の内まで2 kmも3 kmも続いていた。

クレムリンから南西にあたる所の小高い台地はレーニン丘で、ここにモスクワ大学がある。正面の建物は左右全く同じで、真中が真線的な高い塔のようである。日本の議事堂を上へ上へと垂直に延ばしたような建物で面白味が全くない。これを背にすると、モスクワが一望出来て、モスクワ大学と同じ形の大きな建物が突出して見える。円い金色の高い屋根も突出して見えるが、これらは市内各所にある寺院の建物である。

市内はクレムリン近くが、帝政ロシア時代の建物の街で、どっしりと重々しくて美しい。やや遠く離れると近代的な建物が多く、華やかな繁華街といった感じである。ここに人々が沢山歩いている。よく歩いている。車はあまり通らない。男も女も胸を張って威張って歩いている。その間を歩く少年少女は細くて、透けているように白くてきれいで可憐である。この少女がどのように変化したのか、横を歩く中年以上の女性は想像を絶した太さであった。地下鉄やバスの腰かけにデンと坐り、ネックチーフを被っている。しかし、こちらを見ている碧眼とやや引きこんだ口元は不思議な優しさがあつた。

街の各所では長い列を作って、人々が何物か、何事かをじっと待っていて、その顔には苛立ちがなく、つやがある。ロシア人は万事が大まかである。買物には手間がかかり、買いたいものを伝票に記入してもらって、カウンターで金を払って、その後で品物を受け取る。売手は大い中年の女性で、大きな宝石のついた指環をしたごつい指で、子供の玩具のような大きな算盤の赤や黄色の玉を、パチン、パチンとカ一杯はじいて長い間かかって計算する。どういうつもりか、おつりの端下金はくれない。この恐れ入った慣習はモスクワでも、ウズベク共和国でも同じであった。

タクシーも拾えず、バスにも乗れず、雨の石畳

の舗道を歩き疲れて、カフェみたいな所に入って腰かけると、若者が大勢食事をしていて。ピロシキとサラミソーゼをもりもり食って、芳しくないコーヒーを飲んでいて。ホテルロシアの食べ物も、食器ばかり並んではいるが、大体おなじようなもので、美味しいものはなかった。名にしおう蝶鮫の卵のキャヴィアも、感激するほどの味ではなかったし、羊の肉だんごも鼻についた。野菜は香りのないお化けのような胡瓜と小さいトマトであった。しかし、コニャクとウオッカは一口飲んで、不覚にも涙が出た。それほどすばらしい味と匂いであった。あの可憐な少女たちも、黒パンとじゃがいも、ピロシキを食って、ボルシチを飲んで、屈托なく働いて日を暮し、やがて絶望的な太さになることであろうなどと思いながら、ホテルの部屋で同伴した家内と共に、コニャクとウオッカを何杯も飲んで、偉大なるロシアを讃えた。

2. 講演の紹介

会議で用いられた言葉は、ロシア語、英語、フランス語、ドイツ語およびスペイン語の5か国語で、参加者はこの言葉によって色分けした氏名札を胸につけた。

講演は次の分科会に分れた。

解剖、生理、生化学と薬理、寄生虫、飼料衛生と獣医公衆衛生、動物学、病理解剖、微生物と免疫、外科、小動物、反芻獣、豚、馬、家禽、その他の動物、獣医行政、獣医教育、獣医学史、その他。

分科会会場はホテルロシアの4つのホールと、1か所がホテルの外の建物が当てられ、家禽分科会は南玄関正面のコンサートホールであった。家禽分科会では5つの課題について、夫々2~4の発表と30余の短報があつた。なお、家禽分科会への我国の出席者は鶏病支場の川村齊博士と私であった。

家禽分科会の講演を聴いて、総括的に次のような感想を持った。

免疫機構、抵抗性、病原体の病原性についての基礎的研究発表も多くあつたが、同時に発病とか免疫に及ぼすストレス、環境、血清の成分についても考察が多くされ、さらに他病の感染と免疫と

の関係など、鶏病とその抑圧に対する多角的な検討が目立った。また、実際の抑圧手段、疫学的調査の発表が多くて、各国の状態を認識出来た。

モスクワでの開催であるので、ソヴィエトからの発表が多いのは当然で、その内容は鶏病の予防、抑圧のための種鶏段階での調査と手段が主で、実用的な応用が多かった。

1) 免疫機構と感染症

座長: BURMESTER (米国)

副座長: PAYNE (英国)

我国でも関心の高いガンボロ病の免疫について、FLETCHER (米国) が病原性の強い生ワクチンはヒナのファブリキウス嚢のリンパ球に障害を与えること、種鶏に与えたときは強い移行抗体をヒナに生じ、ヒナに対する強毒攻撃による免疫抑制を防御すること、さらに不活化や弱毒ワクチンはその効果が劣ることを述べた。

VON BÜLOW (西ドイツ) はマレック病リンパ細胞の表面抗原の蛍光抗体法と細胞障害テストによる研究結果として、リンパ腫瘍細胞系には血液グロブリン抗原としての差異が見られ、共通抗原は証明出来なかったと述べ、JMV に対するヒナの抵抗性は組織適合性抗原、胎児抗原およびリンパ球によって誘起されるという発表をした。

BESSARABOV (ソヴィエト) は鶏の非特異的抵抗性について、自然抵抗性の要素としての血清のアルカリ性、リゾチームの量、赤血球、ヘモグロビンおよびヘマトクリット値と飼養条件や産卵との関係を述べた。大した相関はなく、これらの値は安定したものであった。

2) 産卵異常における病原体の役割

座長: DEVOS (ベルギー)

副座長: SAMBERG (イスラエル)

この課題は実際の意味でも、非常に関心を惹くが、主に産卵低下症候群 1976 年 (EDS-76) について報告があった。EDS-76 は 1976 年以来、オランダおよび西欧において、重要な問題となっている病気で、産卵ピークに到るまでに産卵低下や、褐色卵では脱色した卵を産むという症状を示す。既知のトリアデノウイルスとは抗原的には一致しない血球凝集性のあるアデノウイルスが病原体とされているが、その疫学についてはなお不明

な点がある。今回の VAN ECK (オランダ) の報告は 73 群について、トリアデノウイルスと伝染性気管支炎ウイルス (IBV) の寒天ゲル内沈降反応抗体 (AGP)、BC14 株の血球凝集抑制抗体およびマイコプラズマ・ガリセプティカム (MG)、マイコプラズマ・シノヴィエ (MS) の抗体を調査した結果についてである。BC14 株は BAXENDALE が分離した EDS-76 の病原体とされるアデノウイルスで、McFERRAN の分離した 127 株と抗原的に一致する。EDS-76 という症状をおこした群は、BC14 の高い抗体力価とトリアデノウイルスと IBV の高率の AGP を示した。EDS-76 以外の産卵低下をおこした群ではトリアデノウイルスの抗体反応は多いが、IBV の抗体は低率で、BC14 の陽性率も低かった。他の産卵低下という症状の群は飼料上の問題および MG の感染などがあろう。正常な産卵をしている群は、トリアデノウイルスの反応が低く、IBV の抗体反応が区々であった。これらの結果から、EDS-76 という症状を惹きおこす引金として、IBV の感染と産卵ピークのストレスの役割を示唆したことは興味深い所である。

EDS-76 に対する試作ワクチンの野外試験について、BAXENDALE (英国) から報告された。油性アジュヴァントの不活化ワクチンを英国、オランダおよびベルギーの 29 養鶏場で、かなり大規模に試験して、攻撃の結果から有効性を立証し、その症状のおこる原因の主たるものは EDS-76 ウイルスであることを強調した。

短報の中で LÜDERS が産卵低下の原因として、病原微生物の感染によらない場合が多いことを述べたのは当然で、採卵養鶏場や種鶏場でおこっている産卵低下は、我国においても他の様々な原因がある。LÜDERS はミネラルの不均衡、カルシウムの欠乏および塩素の過剰を上げた。

この他に、この課題とはやや離れた感じであったが、孵卵中の胎児とヒナの死亡率を高める原因として、卵殻を通して感染するサルモネラ、リステリア、ミクロコッカスおよび大腸菌について、疫学的な、また飼料衛生からの検討が西ドイツの MATTHES から報告された。

3) 感染症の疫学

ソヴィエトにおける白血病の状態が報告されて、リンパ性白血病が70~90%を占め、骨髄性、赤芽球性白血病は2~3%で、他は0.5~2%であること、白血病の抑圧のための実際的な方法として、疫学的調査の必要性、gs抗原の抗血清の応用を述べた。なお、マレック病は食鳥、採卵鶏の系のいづれにも広く浸潤している。短報において、チェコスロヴァキアより、1971~1972年という古い状況ながら、HVTワクチンの効果が述べられ、マレック病による平均死亡率は0.84~1.08%で、死亡鶏の中でマレック病による死亡の占める割合は16~20%に及ぶという。我国のマレック病の現状と比較して興味がある。

西ドイツから、野鳥のインフルエンザAウイルスの分離報告があった。小鳥、オウム類、カモ類など、東南アジアを含む世界各地の1,051羽の野鳥から分離を試み、カモ類から7株を分離した。なお、我国でも最近これらの報告がなされている。

カナダのWALKERから伝染性喉頭気管炎の疫学的調査についての報告があって、カナダにおける本病の蔓延も相当なものようで、ワクチンの防疫上の効果について述べられたが、ワクチンの応用方法に対して質問が集中したのは、我国と同様であると思った。点眼方法を強調し、飲水投与は効果がないという。各国のこの病気に対する関心の大きさを推察出来た。安全性が高く免疫効果の高い優れたワクチンを用いているとは思われなかった。

4) サルモネラ感染症と抑圧

座長: GYLSTROFF (西ドイツ)

副座長: ZOHARI (イラン)

オランダでのヒナの*S. agona*と七面鳥の*S. arizona*の汚染状態と、ホルマリン燻蒸、ゲンタマイシンおよびネオマイシンのディッピング、気管内注射の効果について述べられた。ソヴィエトからは種鶏における空気消毒のための紫外線と化学薬品の噴霧の効果について報告があった。

5) ニューカッスル病の抑圧

座長: 川村 斉 (日本)

副座長: SIEGMANN (西ドイツ)

ニューカッスル病の化学療法について、西ドイツから報告があり、Impacarzinという薬剤によ

って、ヒナや成鶏の発病率、死亡率を減少させることが出来ると述べ、その応用で重要な点として、感染と薬剤応用の時期および用量を上げた。ニューカッスル病の化学療法というあまり聞いたことのない報告であった。ニューカッスル病の予防については、ワクチン接種以外の方法は検討されていない我国においては、実際的に応用する必要はないと思うが、私にはよく理解出来ない。

ニューカッスル病の免疫効果に及ぼす大腸菌の敗血症と伝染性気管支炎の感染の影響を述べたソヴィエトのGROSHEVAの報告は、実際的な面から関心があった。脾臓とファブリキウス嚢の萎縮によるリンパ球の免疫産生能の低下は、ワクチンの免疫効果に影響があるという。

ニューカッスル病不活化ワクチンと生ワクチンのいづれかを接種したブロイラー種鶏からのヒナの移行抗体による防御計画について米国のEIDSONが報告した。生ワクチンはB1あるいはLaSotaで、3回飲水投与し、不活化ワクチンは油性で18週齢で接種した。ヒナの移行抗体は不活化ワクチン接種種鶏からの方が均一であり、ヒナの移行抗体が最も有効である時期を計画的にするには不活化ワクチンを用いた方が容易であると述べた。

この課題で最も興味があったのは、ニューカッスル病ウイルスとコクシジウムのオーシストを感染させた鶏が排泄するオーシストの中には、ニューカッスル病ウイルスが維持されているというユーゴスラヴィアのSIBALICの報告であった。そのオーシストの表面にニューカッスル病ウイルスが附着しているのではないかという当然な質問があったが否定された。

以上の5つの課題についての報告の他に、30に及ぶ短報の発表があった。その多くは各国の感染症の状況と抑圧についてであった。

ソヴィエトから伝染性気管支炎の生ワクチンの経済的効果と、伝染性喉頭気管炎の不活化ワクチンによって、野外で見べき効果があったことが報告された。野外の伝染性喉頭気管炎のワクチンの効果の判定は難しいが、非接種対照群に比べて、明らかにワクチン接種群は発生率が少なかったという。

チェコスロヴァキアからは 1976~1978 年の間、126 群、1,031 の血清についての感染病原体の抗体調査が述べられた。トリアデノウイルス、レオウイルス、ガンボロ病ウイルスはいずれも、25~40%、MG は 20 週齢で 69.3% という高率の陽性を示した。MG の陽性率の高いことは、私共の資料と共通している。

ニューカッスル病の状況として、ブルガリアで 1974~1975 年の間に各地から Velogenic (強毒) 株が分離され、2 株が向神経性株で、10 株が向臓器性であったという報告があり、キューバからも野外から分離された株は Velogenic 株で、最も病変が顕著なのは気管であって、気管内、点眼、点鼻および経口接種の各経路によって病原性に大差はないという。

ニューカッスル病の抑圧について、ソヴィエトから種鶏に対する生ワクチンの噴霧接種の有効性について、また、ブルガリアからは、プロイラーの実際的なワクチン応用は 21 日齢の B1 生ワクチンの噴霧接種がよいということが述べられた。

ブルガリアからは、ニューカッスル病ウイルスをヒナの気管培養によって継代し、このウイルスは 70 日間鶏に持続感染していたという報告があった。

我国からは鶏病支場の川村が鶏の腎炎をおこすピコルナウイルスの分離と、実験感染の病理について述べ、多くの関心を集め、分離ウイルスの抗原性の同異について質問があった。

鶏痘については、ソヴィエトとキューバから夫々報告された。ソヴィエトからは、外部寄生虫と耐過した鶏に持続されているウイルスが、非定型的な症状を示し、時にマイコプラズマ感染症、伝染性気管支炎や大腸菌症と合併症を引きおこすと報告され、さらに、鶏痘の抑圧は感染源を根絶することが主眼で、飼育管理と栄養バランスのとれた飼料の給与の重要性を述べた。また、ワクチンとしては鳩痘由来のワクチンに優る“27-Ash”株を弱毒したワクチンが長期に亘る免疫を獲得するという。キューバからは、蚊によって注入されたウイルスの鶏体内の動きを実験的に追跡した報告があり、肝には 7 日まで、血液と脾には 9 日まで、肺と肉冠には 21 日までウイルスの存在を認

めた。

MG 汚染群に対して、タイロシンの微量 (55 ppm 以下) を長期 (20~55 週齢) に亘って飼料に添加したところ、産卵量を上げ、卵質を向上させる効果があったという成績が、米国のリリー研究所から報告された。そのメカニズムはともかく、マイコプラズマ感染と産卵との関係において、実際的にもかなり関心を惹く。

スウェーデンのプロイラーに拡がったサルモネラ汚染と、その抑圧手段として、プロイラー産業の生産過程の各要所での定期的調査の有効性が述べられた。フランスからはひな白痢の非特異的反応について、他の腸内細菌との交叉反応と、鶏の品種による感受性の差が述べられた。

英国においては、1977~1978 年の間に、プロイラーの *Pasturella multocida* による死亡がかなりあり、1 群の 0.15% から時には 50% にも及んだこともあったという、注目すべき報告があったが、本病の被害の大小は環境に関連する所が大であるという。*Pasturella* に関しては、ソヴィエトから種鶏へのワクチン応用で、免疫効果が高いことが述べられた。

西ドイツから、1 日齢から 164 日齢に至るまで、6 回に亘る血清中の成分と酵素の消長について述べられ、総脂質とトリグリセライドの性成熟に伴う急上昇、コレステリンとカルシウムおよび総蛋白の増加、アルカリフォスフェイトの減少があるという。

他の家禽では七面鳥の *Bordetella bronchiseptica* 様の細菌によっておこり、鶏のヒナおよびアヒルにも人工感染がおこると西ドイツから報告された。ガチョウの *Erzsy* 病の病原体であるバルボウイルスのガチョウの胎児線維芽細胞継代株によるワクチンの効果がハンガリーから報告された。

3. 中央アジア紀行

7 日間の会議が終った後、中央アジアの西トルキスタンの旅をした。日本人の一行は、今道、河崎、川村、小木田、西田、野田、浜名、星野、中山、吉村夫妻の 11 人であった。

7 月 8 日午後 1 時 30 分、モスクワ空港発、ジ

ジェット機でおよそ3時間半。タシケント空港に降りた私達を襲ったのは強烈な熱気であった。中央アジアは東トルキスタンと西トルキスタンに分れ、私共の訪れたのは西トルキスタンのウズベク共和国の3つの都市であった。西トルキスタンは西はイラン、イラクさらにアラブに通じ、東はパミール高原からタクラマカン砂漠の東トルキスタンを経て、中国に通ずる砂漠地帯である。

8世紀にはアラブ、13世紀にはジンギスカンのモンゴルに蹂躪され、14~15世紀にはチムール王国の支配下となった西トルキスタンは、その後、帝政ロシアの支配する所となり、今、ソヴィエト連邦の3つの共和国に分れている。タシケントはウズベク共和国の主都で、市内には近代的な建造物が多く、道路は幅広く整然とし、木立も多く、緑豊かである。1966年には大地震があって市の3分の2が破壊され、多くの人が死んだ。驚くほどの、また、いかにも造られた近代的な都市は、この破壊からの復興に由来する。

レーニン像が中央に立っている大きな広場には市民のための博物館、図書館、大学などが並び、大きな噴水がいくつもあって、砂漠の地にどうしてこのように豊富な水があるのかと不思議であった。ここは歴史を偲ぶにはあまりにも近代化している感じであったし、昨日まで見て来たロシアとは全く別な世界であった。人々は雑多で、ウズベク人、ロシア人、カザフ人、キルギス人、モンゴル人、アラブ人、タター人等々という。街や市場で会った人達の多くは、黒い髪と黒い眸と褐色の肌をしていた。回教徒の印という四角い小さい帽子を載せている男が多い。この帽子はチュベユイカというそうだ。ヴェトナムかヤボンかと聞く。日本人だというと親しそうに笑ってさらに話かける。ウズベク・ハラショーという、大変よろこんで市電の席に坐れとってすすめてくれた。

タシケントからブハラへの飛行機は小型ジェット機で、砂漠上空 6,000 m を飛んだ。眼下は淡褐色ただ一色であったが、曲りくねった、あるいは真直ぐな筋が幾条も見えた。淡褐色の山脈の山壁の間には集落らしいものもあった。砂漠の果ては遠くかすんで、その向うに遠く高く、青空をよ

ぎって雪を戴いた山脈が異様な美しさで連なっていた。パミール高原の連山であろうか。

ブハラは古い都らしく、市の中心には内城の遺跡があり、市外の何もない黄土色の砂上に崩れた城壁が続いていた。50°C の炎熱の下で喘ぎながら眺める廃城の姿は凄味をただよわせていた。ここで見る内城の内部とか、陳列されている絵、昨夜見た月の光の中の廃寺、裸足の子供たちなど、何となく暗さがつきまとっていた。

木立の群れの中にある茶飲み所に入ると、木蔭に縁台がおいてあって、回教徒の帽子を被った男達が寝そべっていた。ここで会った東洋人らしい丸顔の若い女性は日本人を母にもつといていた。ガイドである。

待たされることに慣れてしまった一行は、漸くプロペラ機に乗ることが出来て、午後8時、夕暮れのブハラ空港を飛び立ち、50分で夜のサマルカンドに着いた。

サマルカンドはチムール王国の主都として、14世紀以後栄えた都市で、シルクロードの要点として知られた。市内各所には往時の繁栄を偲ばせる建物が多い。市の中央にあるレギスタン広場の、今日でもそのまま使用されている大きな回教学校は、小さな石が敷いてある石畳の大広場を取り囲む3つの荘麗な建物で、ペルシャ風の精緻でまばゆいばかりのモザイク模様で彩れていた。

市の北部にある小高い丘に上ると、市の全体が一望に納まり、瑠璃色の円い屋根があちこちに見え、青い青い恐ろしいほどの青さの天空の下で、灼熱の陽の光に光っていた。丘にはチムールの孫のウルグ・ベクの造った天文台の跡があって、半ば地中に埋れた巨大な六分儀が遺っていて、かつての文化と学問の高さを誇示していた。

砂漠とその間に点在するオアシスの町に、紀元十世紀から人が集り、文化と学問が栄えたことは不思議に思えたが、不思議に思うのは温湿の地に生きた私であるからで、人が生きて、生活を営み、文化を造るには程よい自然の恐威と恵みがあった所かもしれない。遊牧騎馬民族が興り、オアシスを襲っては殺し、壊し、築き、興亡をくり返しながらしかも、文化を持ちこみ、創り、熟させたこの地は、日本人には遠い遙かな国であった。

しかし、シルクロードの名と共に、同時に、夢と憧憬を抱かせ続けた土地でもある。東はバミール高原、タクラマカン砂漠を経て、中国西域から中

国、さらに日本があるが、私共はモスクワから南下して、裏側から中央アジアに足を踏み入れたことに、感懐と興奮を覚えた。

《文献紹介》

オンタリオ州（カナダ）の肉用鶏に見られた塊状肝出血 (Massive Liver Hemorrhage in Ontario Broiler Chickens)

GOUGH, A. W. and WEBER, L. J.

(*Avian Dis.* 22, 205~210, 1977)

1972年、オンタリオ州南部の一ブロイラー鶏群に肝臓の塊状出血(MLH)を主病変とする疾病が発生し、2~4週齢の間に毎日0.5%が死亡した。斃死鶏は明らかな臨床症状を示さず、時に嗜眠状態を呈し、皮膚が冷たくなり、下腹部の皮膚が青変するものがあった。剖検すると、腹腔内に1~2mlの腹水を入れ、肝臓は腫脹し、表面に多量の血塊が付着しており、肝臓の両葉全域にわたって出血による血斑が見られた。出血部位は時には癒合し、限界明瞭な血腫を形成していた。これらの出血は肝包膜から肝実質の深部にまで及んでいた。組織学的には肝臓の病巣は、肝細胞の核濃縮、類洞の拡張、肝細胞の解離からなり、種々の大きさの壊死巣があった。壊死巣は蛋白性凝塊により置換されたり、あるいは赤血球を多数入れていた。一部の壊死巣は結合織の薄い膜で取り囲まれていたが、多くは被包化されず、限界明瞭な血腫を作っていた。肺は著しく水腫性で、第2次気管支腔内と小葉間に浮腫が見られた。

このような病変を主体とする病気は、その後1973年から1976年の春までこの地方では毎年報告されており、

それらの発病鶏群は、1972年から1976年まで同じ飼料工場からの飼料を給与されていた。その飼料には蛋白源の一部としてナタネ粕が全飼料組成の10%添加されており、実験的にナタネ粕を10%添加した飼料を給餌した産卵鶏群にもMLHが発生したとする報告がある。そして、その発生率は飼料中のナタネ粕含量に相応して増加の傾向を示すとされている。この産卵鶏群のMLHでは肝臓の脂肪沈着を伴うが、これは産卵鶏の脂質代謝の増加によるものと思われる。また、YAMASHIROもナタネ粕50%含有飼料の給与と実験でMLHが起こることを報告している。さらに、幼雛用飼料へのナタネ粕の添加を止めてからはMLHの発生は見られていない。

ブロイラー業者はMLHを、急死することから急性死亡症候群(ADS)に入れていた。ADSは成長期の鶏に限定されず、孵化後第一週から出荷齢に至るまでの間継続して起こるし、肺の水腫は強いものの、肝出血と腹部の凝血塊は見られない。したがって、MLHはADSからは区別される一疾病である。

(鶏病支場研修生 相良美佐子抄訳)